

“緩和ケア体験記”

病床にて、最期の原稿。

2017年3月に生涯を閉じた父。
亡くなる直前まで病床で書いていたのは、
転院先の佼成病院ビハーク病棟（ホスピス）での体験記でした。
遺稿となった緩和ケア体験記より、一節を紹介します。

患者をデータでみない。
患者を生きものとみて、寄りそってくれる。
延命治療はしないし、死を早める行為もしない。

「今ある生命の尊厳にとことん寄り添います」という。

——こんなチームマネジメントがどうしてできたの？
という僕の質問に、担当のナースは
「緩和ケアは、看護の原点」と言われるのです!!
と答えてくれた。

赤ちゃんがオギャーッと産まれた時から緩和ケアがはじまり、
僕が上瞼を閉じる瞬間まで、
実は人間は病めるときには緩和ケアを必要としているのだと思う。



■竹永睦男 / 膵臓がんと診断され、2015年夏に膵臓、脾臓、胆管、十二指腸等の摘出手術を受ける。
その後抗がん剤等の積極治療を試みるが、佼成病院（東京都杉並区）緩和ケア・ホスピス病棟へ入院。
「この素晴らしい体験を、広く知ってほしい」と体験記の執筆にとりくむ。
体験記の全文は、小社より電子書籍化を予定。
株式会社ロングテーブル <https://www.longtable.co.jp/>